

④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第 27 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会（修 12）	修復技術部	83
国際文化財保存修復研究会の実施（セ 11）	国際文化財保存修復 協力センター	84
美術部オープンレクチャー（美 13）	美術部	85
芸能部公開学術講座（芸 06）	芸能部	86
芸能部夏期学術講座（芸 06）	芸能部	86
民俗芸能研究協議会（芸 13）	芸能部	87
文化財保存修復研究協議会（保 17）	保存科学部	88
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修 01）	修復技術部	88
在外日本古美術品調査報告会（*修 05）	修復技術部	89
総合研究会（情）	協力調整官 —情報調整室	89
美術部研究会（美）	美術部	90
保存科学部研究会（保）	保存科学部	91
各国の文化財保護制度に関する研究会（セ）	国際文化財保存修復 協力センター	92

- *注 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①修 01）の一環として実施した。
- ・在外日本古美術品調査報告会は、在外日本古美術品保存修復協力事業（②修 05）の中で包括的に実施した。

第27回文化財の保存・修復に関する国際研究集会
「漆が語る国際交流～海を渡った文化財情報～」(④修 12-03-1/1)

第27回国際研究集会は、修復技術部の担当で行われた。東京文化財研究所では、1993年に漆をテーマとした国際研究集会を開催し、日本をはじめカナダ、ドイツ、アメリカの専門家を招へいし、日本の漆芸品の歴史、美術品としての漆芸品、有機化学から見た漆液、漆芸品の保存修復事例など、各国の抱える諸問題を明らかにした。この成果はヨーロッパ各国へ波及し、1996年にイギリス・エジンバラで漆に関する国際集会、1998年にはドイツ・ミュンヘンで漆のシンポジウムが開催された。前回の国際研究集会から10年を経た現在、海外の博物館・美術館の保管する漆芸品の保存と修復に関する質問や要望が多く寄せられるようになり、当研究所でも ICCROM とともに国際研修「漆の保存と修復」を開催することで、このようなニーズに対応している。さらに、最近では今まで調査の及ばなかった東欧諸国などで本格的な調査が行われ、その成果として相次いで日本製輸出漆器に関する特別展が開催されている。今回の国際研究集会では、最新の修復事例から得られた美術史的な新知見や修復技術の概念など、各国の専門家による講演と総合討議から、漆芸品の新たな保存修復に関する情報交換を行った。

期間：2003（平成15）年12月3～5日、場所：東京国立博物館平成館大講堂

<セッション1（12月3日）>

1. 展覧会「江戸蒔絵」の会場構成と作品の概要について
小松 大秀 東京国立博物館
2. 明治期輸出漆器とそのハンガリー人収集家たち
モニカ＝ピンチク ホップ・フィレンツ東洋美術館
3. 南蛮様式の円筒形箱について—フィレンツェ・ピッティ宮殿の箱と手稿資料—
小山 真由美 イブレア市立美術館
4. ポルトガルの南蛮漆器
ペドロ＝アブレウ リスボン国立文化財保存修復研究所
5. チェコに残った日本漆器—17世紀後半から18世紀前半まで—
フィリップ＝スホメル プラハ国立美術館アジア館
6. ヴィクトリア&アルバート美術館の日本漆器
ジュリア＝ハット ヴィクトリア&アルバート美術館
7. 欧米所在の中国漆器
西岡 康宏 東京国立博物館
8. 台北故宮博物院の日本漆器
永島 明子 京都国立博物館

<セッション2（12月4日）>

基調講演 日本における文化財修復と復元模造の理念

- | | | |
|------------------------|---------|----------|
| | 鈴木 則夫 | 文化庁 |
| 1. 正倉院における漆芸品修復と復元模造 | 木村 法光 | 京都市立芸術大学 |
| 2. 中尊寺金色堂の修理と復元 | 中里 壽克 | 鶴見大学 |
| 3. 中尊寺堂内具の復元模造について | 小西 暁也 | うるし博物館 |
| 4. 文化財修復における材料・技法の変遷 | 加藤 寛 | 東京文化財研究所 |
| 5. 伝統的技法によるミャンマーの漆器の修復 | フランク＝ミニ | 東京芸術大学 |

<セッション3（12月5日）>

1. 重要文化財千體寺紫檀塗螺鈿厨子（鎌倉時代）の保存修復について
北村 昭斎 重要無形文化財保持者
2. マゼランチェストの保存修復について
シャイン＝リバース ヴィクトリア&アルバート美術館
3. マゼランチェストの保存修復計画について
山下 好彦 文化財漆修復家
4. 朝鮮時代の螺鈿漆器の漆技法研究と修理復元
金 庚洙 韓国・国立中央博物館
5. 朝鮮時代の朱漆竹装硯箱の修理
李 容喜 韓国・国立中央博物館
6. ハンガリーにおける日本の甲冑の修理
バラシュ＝レンツ ハンガリー国立博物館

国際文化財保存修復研究会 (④セ 11-03-3/5)

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人びとの接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる外国、地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、毎年2回、国際文化財保存修復研究会を開催し、専門家による報告を通して、具体的な海外での保存事業における技術的な問題から運営面、財政面の問題、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる研究会を開催して情報交換の場を提供している。

第14回国際文化財保存修復研究会

テーマ：イラク文化遺産保護の地平線

趣旨：2003年4月に戦争の終結をみたイラクについて、国際機関および日本の政府機関、研究機関、大学等がその復興支援策の検討を開始した情勢を受け、文化財研究所としてイラク文化財の特質、またその置かれている状況についての情報を収集するために研究会を開催した。

日時：2003（平成15）年7月1日（火）13:10～18:10

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：112人

講演：

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 「イラクおよびイラク国民における文化遺産の認識」 | 中東調査会客員研究員 大野元裕 |
| 「イラクにおける建築遺産」 | 国士舘大学イラク古代文化研究所教授 岡田保良 |
| 「文化財流出防止とその保護」 | 国士舘大学名誉教授・文化庁調査員 藤井秀夫 |
| 「西アジア考古学におけるイラク文化遺産の重要性」 | 東京大学総合研究博物館助教授 西秋良宏 |
| 「松本健国士舘大学イラク古代文化研究所教授撮影のビデオ上映」 | |
| | （解説 国士舘大学イラク古代文化研究所教授 岡田保良） |

第15回国際文化財保存修復研究会

テーマ：日干し煉瓦の保存

趣旨：平成14年度に開催したアフガニスタンの文化財保護に関する研究会（第13回）に続いて、イラクの文化財保護に関する研究会（第14回）を開催した結果、西アジアをはじめ世界各国に残されている日干し煉瓦によって構築された文化遺産の保護が、緊急かつ重要な課題であることが浮彫りになり、今回は日干し煉瓦の保存についての研究会を実施した。

日時：2004（平成16）年1月30日（金）10:00～17:00

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：90人

講演：

- | | |
|---|----------------------------|
| 「日干し煉瓦遺構保存をめぐる世界の実状」 | 国士舘大学イラク古代文化研究所 岡田保良 |
| 「エジプトの遺跡環境と日乾煉瓦遺構の保存動向」 | 早稲田大学エジプト学研究所 長谷川奏・柏木裕之 |
| 「日干しレンガ及び焼成レンガの水理特性と長期健全性評価—イラン及びカザフスタンでの遺跡修復調査結果から—」 | 埼玉大学 渡辺邦夫、核燃料サイクル開発機構 天野健二 |

第37回美術部オープンレクチャー 「日本における外来美術の受容」(④美 13-03-3/5)

美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しており、本年度で37回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日連続で開講し、聴講者の便宜を図るよう努めた。前回に引き続き、美術部の研究プロジェクト「東アジア地域における美術交流の研究①日本における外来美術の受容に関する調査・研究」をテーマに掲げた。個々の講演内容は下記の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ200人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、124人から回答を得た。「たいへん満足した」55人(44%)、「おおむね満足した」54人(44%)、「不満が残った」6人(5%)、無回答9人(7%)という結果であり、回答者の88%が満足感を得たことがわかる。

第1日：2003(平成15)年10月17日(金) 午後1:30~4:00 於東京文化財研究所・地階セミナー室

◇勝木言一郎(美術部)「古代日本における極楽イメージの変容」

法隆寺金堂壁画第6号壁や当麻曼荼羅はこれまで日本古代の浄土教美術を代表する作例として総括され、そして「法隆寺金堂壁画から当麻曼荼羅へ」という史的展開が語られてきた。しかし中国において類似作例に関する情報がしだいに明らかにされ、こうした関連図像の展開について考察が可能になったことで、それらに対する位置づけも見直す時期にきたと思われる。そこで今回の講演ではそれぞれの作品解釈を踏まえた上で、浄土図の展開に対する見方、日本における浄土教美術研究形成のメカニズム、そして阿弥陀三尊五十菩薩図・阿弥陀浄土変相に関する中国での展開、日本での受容、そして中国と日本におけるその後の展開について解説を試みた。

◇内田啓一(昭和女子大学助教授)「日本に請来された宋時代の版画」

平安時代には我が国に絵画・彫刻・工芸・書など種々の品々が入宋僧によって中国から請来された。従来あまり注目されることがなかったが、版画も請来されている。版画は請来されると、図像に写され、寺院の宝蔵に納められた。密教図像のなかには原本が版画と思われるものが少なからず伝来する。中国では10世紀中頃より木版画が盛行し、それ以降に入宋した■然や成尋が版画を日本に請来している。今回の講演では、中国で制作された版画に注目し、それがどのようにして入手され、請来され、そして我が国でどのような姿となって活用され、また、伝来したかを考えてみた。

第2日：2003(平成15)年10月18日(土) 午後1:30~4:00 於東京文化財研究所・地階セミナー室

◇綿田 稔(情報調整室)「雪舟入明を考える」

雪舟が1467年に渡明したことは美術史上、非常に有名な出来事である。しかし雪舟のような経験をしたのは雪舟しかない。また日本美術史上に雪舟のような中国理解が一大潮流を形成したともいえない。したがって、雪舟入明を東京美術学校で学んだ若い画学生たちが西欧へ留学するのと同様に考えてはいけなしいといえる。また、伝記研究が他の室町時代の画家と比較して飛び抜けて進んでいる雪舟だが、彼をめぐる言説には種々の伝説がまわりついており、逆に事実が見えにくくなっている場合もある。本発表では、一度「どこまでしかわからないのか」に立ち戻り、そこから現時点でどのような語り方が再度組み立てられるのかを問うことを試みた。

◇成澤勝嗣(神戸市立博物館学芸員)「「物はやりする」画家たち—江戸時代絵画の中の唐絵」

江戸時代のはじめ、隠元禪師が中国から黄檗禅を伝えたとき、そこに集まってきたのは多く「物はやりする若者たち」であったという。黄檗は、流行に敏感な若者たちに、物珍しい文化を提供した。好奇心に満ちた日本の画家たちにとっても、黄檗は新しい絵画情報の宝庫であり、創作の飛躍をうながす契機を与えてくれた。唐絵とは、その中から生れてきたあらたな絵画スタイルである。一般にはあまりなじみのない名前だが、唐絵はまず長崎で発生し、のちには伊藤若冲のような個性的な画家にも影響を与えていると思われる。河村若芝、鶴亭といった、最近ようやく注目されつつある唐絵の画家を紹介しながら、江戸時代絵画と唐絵のかかわりを探った。

第33回芸能部公開学術講座「はやり歌撰取の諸相」(④芸 06-03-3/5)

日時：2003(平成15)年12月6日(土)

場所：早稲田大学大隈講堂

入場者数：378名

芸能史研究会との合同で開催した。2003年は、歌舞伎発祥400年目に当たる、と言われている年である。室町末期の流行歌謡を狂言や初期歌舞伎、三味線がこぞって撰取したが、撰取した楽曲に旋律の点での共通性が残っているか否か、また江戸末期の歌謡を落語などが撰取した様子を講演し、実演を通して撰取の諸相を検証した。

プログラム

講演Ⅰ 「近世末の舌耕芸と流行歌謡」	荻田 清 (梅花女子大学教授)
講演Ⅱ 「狂言歌謡の旋律遡源」	高桑いづみ (音楽舞踊研究室長)
実演 地主の桜	野村小三郎 (和泉流狂言方)
講演Ⅲ 「三味線組歌とはやり歌」	野川美穂子 (芸能部調査員)
実演 浮世組・いとし若衆	
忍組・釣狐小歌	
七つ子・七つになる子	富成 清女 (地歌箏曲家)
	野村小三郎 (和泉流狂言方)
講演Ⅳ 「風流踊・かぶき踊とはやり歌」	和田 修 (早稲田大学助教授)
実演 ヒーヤイ踊	徳山古典芸能保存会 (静岡県)

芸能部夏期学術講座 (④芸 06-03-3/5)

第28回夏期学術講座「能の特殊演出(小書)」

日時：2003(平成15)年7月15日(火)～17日(木)

(1) 10:30～12:30、(2) 13:15～14:45、(3) 15:00～16:30

会場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：29名

担当講師：高桑いづみ(音楽舞踊研究室長)

テーマ：「能の特殊演出(小書)」

趣旨：世阿弥が大成して以来、能は演出に工夫を重ねて今日に至った。江戸時代には演出が固定化の方向へ向かったが、その中でさまざまな演出が考案され、小書として特別視されるようになった。小書には時代の好みや当時の役者の姿勢が反映したものが少なくない。今日でも新しい小書が次々と考案されているが、伝統芸能としての能のあり方を考える上で、演出の変容は重要な問題である。そこで本講座では小書の変遷を追いながら、その実態について検証する。

プログラム

第1日	13:15～14:45	序論—小書とはなにか—
	15:00～16:30	小書の流れ
第2日	10:30～12:00	小書の考案者—観世元章—
	13:15～14:45	小書の考案者—金剛右京—
	15:00～16:30	小書のさまざま—囃子の変化—
第3日	10:30～12:00	小書のさまざま—面・装束の変化—
	13:15～14:45	小書の現在
	15:00～16:30	質疑

民俗芸能研究協議会 (④芸 13-03-3/5)

第6回民俗芸能研究協議会「民俗芸能に関する情報の発信と共有」

日 時：2003（平成15）年11月20日（木）10:30～17:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：94名

テ ー マ：民俗芸能に関する情報の発信と共有

趣 旨：芸能部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して民俗芸能の保護と継承について研究協議する会を開催しており、本年は第6回である。文化財としての民俗芸能の保護活動の一環として、一般の人々に対する周知・啓蒙活動がある。とくに近年は、観光産業や町おこし運動の興隆、あるいは情報メディアの高度化などによって、民俗芸能に対する関心を喚起する場は多様化している。今回の協議会では、それぞれの立場でユニークな民俗芸能に関する情報発信を行っている4組の報告者による事例発表と、コメンテーターを交えた総合討議を実施して、文化財としての民俗芸能の意義を広く浸透させるための効果的な情報発信・共有のあり方について協議を行い、その結果を報告書として刊行した。

プログラム：

10:30～10:40	挨拶	東京文化財研究所長	渡邊 明義
10:40～11:25	「インターネット上での民俗芸能情報ホームページの運営の経験から」	民俗芸能写真家・秋川歌舞伎あきる野座理事	
		インターネットホームページ「わざをき通信」主宰	渡辺 国茂
11:25～12:10	「島根県古代文化センターの民俗芸能調査・記録事業への取り組み」	島根県古代文化センター主任研究員	中上 明
12:10～13:30	(昼食)		
13:30～14:15	「パブリック・スペースでの民俗芸能公演の試みー『まるきた伝統空間』を例にー」	財団法人東日本鉄道文化財団事業部主任	清水 広子
	株式会社ソニー・ミュージック コミュニケーションズ企画開発部イベント制作課長		鳩 隆則
	株式会社ソニー・ミュージック コミュニケーションズクリエイティブ本部クリエイティブディレクター		香月 浩一
	株式会社ノンフィクションチャンネル文化情報事業部長		中藪 規正
14:15～15:00	『文化遺産オンライン構想』について」	文化庁文化財部伝統文化課文化財保護企画室	木村 哲規
15:00～15:20	(休憩)		
15:20～17:20	総合討議		
	コメンテーター	民俗芸能学会代表理事	山路 興造
		岡山大学教育学部教授	山本 宏子
	コーディネーター		
		東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室長	宮田 繁幸
	総合司会	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室	俵木 悟

また、昨年度開催した第5回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の映像記録作成」の協議を引き継ぐかたちで、「民俗芸能の映像記録作成」小協議会を立ち上げた。平成15年度は3回の継続的な協議を行った。

第1回	2003（平成15）年6月27日（金）	参加者17名
第2回	2003（平成15）年9月26日（金）	参加者17名
第3回	2004（平成16）年1月30日（金）	参加者13名

第 33 回文化財保存修復研究協議会 (④保 17-03-1/1)

目 的

この研究協議会では、保存調査手法や修復技術など保存と修復に関わる今日的テーマについて、外部に広く知ってもらうために発表および討論の場を設けてきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、平成 15 年度は保存科学部が担当した。

古墳や洞窟は、砂漠地帯など特別な乾燥地域にある場合を除いては、基本的に高湿度下であり、また地下水や雨水の流入等、水分の影響が極めて大きい。したがって、それらの劣化原因、過程を解明し、適切な保存、修復を行うためには、水分の影響とその制御方法についての調査、研究、考察を行うことが不可欠である。そこで、本研究協議会では、この問題について海外の事例を含め、具体的な事例を基にした科学的な調査、研究の発表と討論を行った。なお、本協議会には、長年ラスコー洞窟内の保存に携わってこられたフランス歴史記念物研究所のジャック・ブルネ氏、韓国武寧王陵での保存対策に関わってこられた大韓民国公州大学の徐萬哲教授を招待して講演をいただいた。

テーマ：古墳や洞窟内の水分の影響と保存対策

日 時：2004 (平成 16) 年 1 月 23 日 (金)

場 所：東京文化財研究所セミナー室 参加者：80 名

プログラム

- | | | |
|--------------------------|-------------------|----------------|
| 1. ラスコー洞窟内の壁画の保存対策 | フランス歴史記念物研究所 | ジャック・ブリュネ |
| 2. 王塚古墳の環境と保存の取り組み | 桂川町教育委員会
保存科学部 | 長谷川清之
佐野 千絵 |
| 3. 高松塚古墳周囲の水分環境と石室壁面の水分量 | 保存科学部 | 石崎 武志 |
| 4. 韓国武寧王陵での保存対策 | 韓国公州大学教授 地質環境科学部 | 徐 萬哲 |
| 5. 総合討議 | | |

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①修 01-03-3/5 の一部として実施)

平成 15 年度は、平成 14 年度に引き続き鉄道車両および鉄道関連施設の保存と活用に関する研究会を行った。今年度は、計 3 回の研究会を開催し、我が国における現状および問題点の報告、ドイツ・スイス・イギリスにおける同種の問題点やその解決方法に関する報告を受け、討議を行った。

◇第 12 回 「鉄道周辺施設の保存修復と活用」

日 時：2003 (平成 15) 年 8 月 27 日 (水)

会 場：東京文化財研究所セミナー室 13:00~18:00

講演者：川野邊 渉 (東京文化財研究所) 「文化財としての鉄道遺産の修復について」
大和 智 (文化庁) 「近代化遺産について」
堤 一郎 (職業能力開発総合大学校) 「地域での鉄道文化財活用について」
小西 純一 (信州大学) 「歴史的鉄道橋の現況と保存事例について」
小野田 滋 (日中鉄道友好推進協議会) 「土木史からみたトンネルについて」

◇第 13 回 「鉄道周辺施設の保存修復と活用～ヨーロッパにおける事例」

日 時：2003 (平成 15) 年 10 月 24 日 (水)

会 場：東京文化財研究所セミナー室 9:30~17:00

講演者：アルフレッド・ゴッドヴァルド (ドイツ技術博物館)

「ドイツ技術博物館における鉄道関連施設保存の試み」
ジム・リース (イギリス・ビーミッシュ博物館) 「歴史的鉄道資産の系統だった展示」

ハンス・ピーター・ベルチ（スイス・ARIAS 産業文化）「スイスにおける鉄道関連施設と車両の保存」
 ロルフ・ホフマン（ドイツ・産業考古学事務所）「ドイツにおける鉄道関連施設の保存と保護」

◇第14回「ヨーク鉄道博物館における文化財保存修復の意義」

日 時：2004（平成16）年2月10日（水）

会 場：東京文化財研究所セミナー室 13：20～16：10

講演者：菅 建彦（交通博物館）「英国・国立鉄道博物館と日本」

アンドリュー・ジョン・スコット（イギリス・国立鉄道博物館）

「国立鉄道博物館が鉄道文化財保存に果たした役割」

ヘレン・アシュビィ（イギリス・国立鉄道博物館）「国立鉄道博物館における鉄道車両の修復について」

在外日本古美術品保存修復技術研究会（②修 05-03-3/5 の一部として実施）

東京文化財研究所では、在外日本古美術品保存修復協力事業を行っている。これは、海外で保管されている絵画や工芸品などの日本美術品を対象に保存修復を行う協力事業である。対象となる美術作品は、海外の乾燥した環境のもとで保存されていたために、日本国内のものと比較してひどい破損状態を持つものが多い。そのために、従来の保存修復技術では十分な修復ができないケースもあり、修復に際して様々な実験や物性の調査を行う必要がある。

漆芸品には、金鍍金した飾金具等が取り付けられていることが多く、それらは錆の発生などで脆弱になり変色していることがある。平成15年度は、工芸品の金具の劣化に伴う変色や錆などに関して、その修復に関する研究会を行った。

日 時：2003（平成15）年8月8日（金）

会 場：東京文化財研究所修復技術部第2アトリエ

講演者：内堀 豪（東京藝術大学大学院保存修復工芸研究室非常勤講師）、渡邊 寛規（彫金作家）

「銀の色あげについて」

総合研究会（④情）

所内で開催する総合研究会は、協力調整官—情報調整室が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成15年度は、以下のスケジュールで実施した（会 場：東京文化財研究所セミナー室）。

第1回 平成15（2003）年7月2日（水）

発表者：井手誠之輔（情報調整室）「高麗の阿弥陀八大菩薩像」

第2回 平成15（2003）年9月2日（火）『バーミヤーン遺跡保存事業第1次ミッション報告会』

発表者：稲葉 信子（国際文化財保存修復協力センター）「バーミヤーン遺跡保存事業の全体と現地の状況報告」

西浦 忠輝（保存科学部）「石窟と壁画の保存—その基本的な考え方—」

山内 和也（国際文化財保存修復協力センター）「第一次ミッションの成果」

第3回 平成15（2003）年10月14日（火）

発表者：俵木 悟（芸能部）「鹿島踊りの系譜—房総のミノコドリ（ミロク踊り）を中心に—」

④研究集会・講座等

第4回 平成16(2004)年1月6日(火)

発表者：内田 昭人(修復技術部)「五重塔の耐震性—常時微動測定の結果から—」

第5回 平成16(2004)年2月3日(火)

発表者：田中 淳(美術部)「最近の黒田清輝画の研究調査の成果」

第6回 平成16(2004)年3月2日(火)

発表者：木川 りか(保存科学部)「文化財生物被害防除の新しい考え方—IPM—」

美術部研究会(④美)

美術部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催し、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成15年度は下記のような研究会が行われた。

4月23日 今年度の研究計画について(1)

5月7日 林 洋子(京都造形芸術大学)「移動する作品、旅する画家：藤田嗣治をめぐって」

5月9日 今年度の研究計画について(2)

6月4日 重要美術作品資料集成の計画 津田 徹英・綿田 稔・田中 淳・井手誠之輔

6月25日 臺信 祐爾(東京国立博物館)「東京国立博物館保管黒田資料について 日記および手紙控えを中心に」
小山ブリジッド(武蔵大学)「黒田清輝宛仏語書簡について」

7月23日 津田 徹英(美術部)「横浜・龍華寺 菩薩半跏踏み下げ像 新出の天平脱乾漆像をめぐって」

村上 博哉(愛知県美術館)「松本竣介《画家の像》、《立てる像》、《五人》《三人》の包括的解釈」

9月24日 津田 徹英(美術部)「法然上人像(隆信御影)について」

岡田 健(国際文化財保存修復協力センター)「東寺観智院蔵木造五大虚空蔵菩薩像の調査とその成果」

11月26日 中野 照男(美術部)「バーミヤン石窟壁画の意義と現状」

12月24日 鈴木 廣之(美術部)「明治10年代における欧米人による日本国内旅行と日本美術史の形成」

クリストフ・マルケ(フランス国立東洋言語文化研究所)「明治後期に滞日した仏人エマニュエル・トロンコワと日本の洋画壇」

ディスカッション コメンテーター：馬淵 明子(日本女子大学)

司会：田中 淳(美術部)

1月20日 洪 善杓(梨花女子大学大学院・韓国美術研究所)「江戸時代における朝鮮画の接触と求得の意図 朝鮮通信使を中心に」

2月17日 石 守謙(国立故宫博物院)「テキスト対イメージ 夏文彦『図絵宝鑑』と14・15世紀における中国 絵画に対する日本の反応に関する諸問題」

3月17日 中野 照男(美術部)「東京文化財研究所における近年の中央アジア美術研究」

関 丙勲(韓国国立中央博物館)「韓国における中央アジア考古美術の研究現況」

3月24日 井手誠之輔・城野 誠治(情報調整室)「高麗仏画における北宋理解—鏡神社所蔵水月観音像にみられる 補陀洛山の視覚表現—」



石守謙氏 研究発表後の総合討議

保存科学部研究会 (④保)

(1) 2003 (平成 15) 年 5 月 20 日 (火) 臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会 I

「博物館美術館等における代替燻蒸剤適用の実状」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：38 名

埼玉県立文書館における臭化メチル燻蒸代替に対する取り組み	新井 浩文 (埼玉県立文書館)
国立西洋美術館における虫菌害への対応について	塚田 全彦 (国立西洋美術館)
米国の IPM の事例の中における博物館システムについて	日高 真吾 (国立民族学博物館)
紙資料に対する燻蒸剤の影響	佐野 千絵 (保存科学部)
資料の DNA に対する燻蒸剤の影響	木川 りか (保存科学部)

(2) 2003 (平成 15) 年 12 月 17 日 (水) 臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会 II

「博物館美術館等における IPM—生物被害の回避、遮断、検出段階の方法論」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：32 名

千葉県立中央博物館における有害生物調査の実施例	斉藤 明子 (千葉県立中央博物館)
正倉院の曝涼	成瀬 正和 (宮内庁正倉院事務所)
カナダにおける IPM—建物のデザインと「回避」「遮断」「検出」段階	木川 りか (保存科学部)

(3) 2003 (平成 15) 年 11 月 19 日 (水)

「文化財の保存 (収蔵展示) 環境の研究—文化財施設の水分、湿度に係わる諸問題とその対策—」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：45 名

文化財施設の水に関わる諸問題とその対策	石崎 武志 (保存科学部)
室内の温湿度の解析手法について	銚井 修一 (京都大学教授)
ドレスデン聖母教会 (Church of Our Lady) の建物内部の温湿度解析と結露対策	ピーター・ハウプル (ドレスデン工科大学教授)
建物内部の水分量、湿度を解析するシミュレーション手法の開発と壁面断熱材の開発	ジョン・グルネワルド (ドレスデン工科大学研究員)

(4) 2003 (平成 15) 年 11 月 20 日 (木)

「石造文化財、石造建造物中の水分移動解析と水分特性の測定」

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：15 名

寒冷地における歴史的建造物の凍結劣化のメカニズム	石崎 武志 (保存科学部)
建築材料中の塩分移動に関するシミュレーション手法の開発	ジョン・グルネワルド (ドレスデン工科大学研究員)
建築材料の水分量、水分移動特性を求めるための実験手法の開発	ルドルフ・プラーゲ (ドレスデン工科大学研究員)
建造物内部の温湿度に対する外気温湿度変化の影響評価	ハイコ・フェヒナー (ドレスデン工科大学研究員)

各国の文化財保護制度に関する研究会（④七）

各国の文化財保護は、国ごとに構築された保護の制度に基づいて進められている。国際文化財保存修復協力センターでは、文化財研究所が国際協力による文化財保存活動を進めていく上での情報を収集するために、また関係する諸機関、団体の活動に役立てていただくために、世界各国の文化財保護制度に関する調査研究をすすめている。これは、各国の文化財保護制度を、文化財保護のための法律、その特徴、法律が成り立った歴史的経緯と文化的背景、文化財そのものの内容と特質、制度を実際に運営していく機構・組織とその機能など、広範な視点から比較研究し、同時に各国の関係機関と情報の交換をはかって双方の文化財保護制度についての認識を深め、今後の国際協力活動のための基盤を築いていこうとするものである。本研究会は定期的なものではないが、科学研究費補助金等各種招へい事業によって東京文化財研究所を訪れた各国の専門家や国内の専門家にお話し、各国の文化財についてさまざまな角度からお話しいただくことを目的に開催している。

第7回各国の文化財保護制度に関する研究会

ドイツでは連邦全体で90万棟に及ぶ歴史的建造物を文化遺産として保存している。この研究会ではドイツにおける近代建築の保存と活用の事例が紹介された。日本でも近代建築が重要文化財に指定されるようになり、また今日注目を集めている近代文化遺産には、ダム、発電所などコンクリート造の構造物が多く、その修理や活用が注目を集めている。さらには、登録文化財制度の導入により、戦後のコンクリート建築の積極的な保存、活用が求められている。日本と同様の問題に直面しているドイツの専門家と共に技術的側面にまで踏み込んで積極的な議論がなされた。

テーマ：ドイツの産業遺産の保存と活用—現代社会に適合した歴史的建造物の多様な再利用—

日時：2003（平成15）年10月15日（水）13:00～17:45、会場：東京文化財研究所セミナー室

講演：

「近代建築を保存できるか」

ドイツ・アーヘン工科大学 ハルトヴィク・シュミット

「コンクリート建築の文化的な修理—表現主義の代表作であるアインシュタイン塔（メンデルゾーン設計）の修理—」

ドイツ・ベルリン美術大学 ゲーハード・ピヒラ

「保存と活用のバランスをどうとるか」

ドイツ・ヘッセン州文化財保存局 ゲルド・ヴァイス

総合討議：「近代建築の保存と活用」

パネラー：ハルトヴィク・シュミット、ゲーハード・ピヒラ、ゲルド・ヴァイス、クリストフ・ヘンリヒセン
（ドイツ・ヘッセン州文化財保存局）

司会：斎藤 英俊（国際文化財保存修復協力センター）

第8回各国の文化財保護制度に関する研究会

これまでフランスの不動産文化財保護については、ヴィオレール・デュクに始まる中世建築の保存、歴史的モニュメント周囲半径500mの景観規制、あるいは作家アンドレ・マルローによる都市文化財の保存制度の創設などが知られている。しかし現代のフランスの文化財保護の全体的な状況や今後の政府の方針、またフランス国内でのプロモーション活動などはほとんど知られてこなかった。今回、フランスの文化財保護の現状について政府関係者から報告を聞き、日本人専門家と活発な意見交換を行った。

テーマ：フランス文化財保護の現在—都市文化財と文化財プロモーション—

日時：2004（平成16）年3月15日（月）10:00～18:00、会場：東京文化財研究所会議室

講演：

「フランスにおける都市文化財の保護の現在」

フランス文化コミュニケーション省・文化財局保護空間及び建築部長 アンヌ＝マリー・クザン

「フランスの文化財のプロモーション活動」

国有モニュメント・センター総監 アンドル・カナス

「フランスの歴史的モニュメント保護の実際」

フランス文化省文化財局・建築文化財総監 ジャン＝イヴ・ルコール

総合討議

司会：稲葉 信子（国際文化財保存修復協力センター）